

気づけば、本日で100号である。休みの日を除いて、毎日出している。そういうつもりではなかった。何か書きたいことがあれば、書こうかというくらいのもりだった。ところが、書きたいものが途絶えることはなく、結局、毎日のように書いている。書くことは考えることである。誰でも考えながら文章を書く。考えながら言葉を選ぶ。考え抜いた末に選んだ言葉を使う。そのためには、選べるだけの語彙をもっていなければならない。

以前にもまして、文章を書くむずかしさがわかってきたように感じる。使う言葉を替えてみる。語順を入れ替えてみる。伝わりやすさが変わる。文章にも熟成期間が必要である。一度、書いてみる。その場で読み返し、推敲してみる。ここで、一旦終わる。数日間置いておく。自分で書いた文章の内容が頭に残っていないくらいがよい。しばらくの期間を経て、再び自分の文章と対峙する。気分は、初めてその文章を読む読者の一人である。すると、ここがわかりにくい、この言葉は合っていないなど、様々なことに気づくことができる。したがって、一つの原稿を世に出すのに、一定の期間を要するようになる。月に一度のペースで掲載させていただいている福島民友新聞の「随想」欄がまさにそうである。毎回、一か月以上の熟成期間を経て原稿を仕上げていく。

では、この「園長通信」はどうなのか。誠に申し訳ないが、熟成期間がなくなってしまった。3月まで出していた「校長室だより」には、約一か月の熟成期間があった。ということは、タイムリーな内容ではないことが多かった。一か月のズレを見越して書くこともあった。ところが、現在はというと、その日ぐらしに近い。その分、タイムリーな話題を取り上げやすくなっている。

どちらがいいというわけではない。プロの書き手であれば、締め切りがあり、その日ぐらしに近いのだろう。新聞の第1面の下にあるコラム欄などはすごいと思う。あの決められた文字数に、あれだけの内容を入れるのである。字数が長くはないがゆえにむずかしい。文章の達人である。

書いていておもしろいのは、現在のその日ぐらしのパターンである。やはり、タイムリーな内容の方が書きやすい、筆が進むことが多い。ただ、文章の完成度といわれると、心もとない。熟成期間を経たものにはかなわないような気がする。そのことを、「随想」の原稿を書くようになって知った。

100という区切りの号を迎え、一度立ち止まり、改めて文章を書くということについて考えを巡らせてみた。書くことはむずかしい営みではあるが、意味のあることである。人には、表現したいという思いがある。私の場合は、書くことが、その一つなのであろう。